

宋代の書家と禪

——蘇・黃・米を中心として——

長谷川 昌 弘

中国書道史は書聖王羲之の出現以来常にそれに対する革新・復古の繰り返しを呈してきたが、その意味においては宋代は革新の時代とされる。古来例えば董其昌の「晋人は韻を取り、唐人は法を取り、宋人は意を取る」なる言に代表される如く、唐代の完成された書法に対し精神性を重視したことが宋代書道の特徴とされる。しかしこのことは政治・宗教・思想等様々の要因が相互に関連してはじめて胎動するものである。なんととなれば宋代は政治的には文官優越の徳治主義をその特徴とし、宗教的には仏教、とりわけ禪宗の流行を招いた。これらの背景なくして特色ある宋代書道の成立は考えられず、中でも当時広範な分野に強い影響を与えた宋朝禪思想との関わりを考究することは不可避であろう。そこで本論では古来より宋代書家の代表とされる蘇軾、黃庭堅、米芾の三者と禪との関わりについて考察したいと思う。

蘇軾（一〇三六—一一〇一）、字は子瞻、東坡居士と号した。

彼は文学に関しても書画に関しても当代一級であった。しかし元来は二十一歳で科擧に合格して以来、一生を官吏として歩んだ政治家であった。その政治生命は非常に波瀾に富んだもので元豊三年（一〇八〇）黃州へ、紹聖元年（一一〇九）南方へ二度流謫されている。そしてこの間に彼の詩書は完熟したとされるが、彼が禪との関わりを深めたのもまさにこの時期である。彼の「黃州安国寺記」にはこの間の事情がよく述べられているが、「蓋_下帰_二誠仏僧_一、求_中一洗_中之_一。…焚_レ香黙坐、深自省察、則物我相忘、身心皆空」の如く、黃州へ流されてからの仏教への傾倒、そして後半からは禪の空思想がはつきり窺われる。時に元豊五年（一一〇八）彼は東坡居士と号し、自らの家の仏教信奉者として世に示すのである。ところで蘇軾が交流した禅僧で最も着目すべきは、東林常総（一二五—一〇九一）と仏印了元（一二〇三—一〇九八）であろう。元豊七年（一一〇八）汝州へ移す命が下り黃州を發った彼は、

途中廬山で遊び東林寺に宿した時常総と「無情話」を論じ、省有って偈を献じたのである。「溪声便是広長舌、山色豈非清淨身、夜来八万四千偈、他日如何拳_二似人_一」なる古来より有名な偈であり、これによって常総の法嗣とされる所以である。一方、当時同じく廬山の帰宗寺には了元が住していた。

了元は後に潤州金山寺に移ったが、元祐六年（一〇九二）蘇軾は彼を訪ねた。この時の様子は『聯燈會要』仏印了元章に詳しいが、了元の四大を坐榻としたいとする蘇軾に対し了元は四大は本来空であるといい、遂に蘇軾は答えられず玉帶を布施し、却って衣を贈られたという。この時の蘇軾の偈が「百千燈作_二一燈光_一、尽是恒沙妙法王、是故東坡不_二敢惜_一、借_二君四大_一作_二繩床_一」である。従来より諸説があるが、彼の禪の理解はこれらの話をみるにかなり深かったと思われる。「嘉泰普燈錄」等三本の僧伝に常総の法嗣として記載されるのも首肯できるであろう。

ところで書家としての蘇軾は次の如き事を強調している。「凡書象_二其為人_一」とか「古之論書者、兼論_二其平生_一。荀非_二其人_一、雖_レ工不_レ貴也」と述べ、書は手先のことでなく人間性が問題であるとする。また「吾書雖_レ不_二甚佳_一、然自出_二新意_一、不_レ踐_二古人_一。是一快也」とも述べている。畢竟これらの言をみるに、彼は書においてその人の人間性ひいては主体的精神を強調したのである。「東坡題跋」の一連の言句はすべ

て右に要約されると言っても過言ではない。そしてこの考え方はそのまま禪思想と軌を一にするのである。そこで蘇軾の代表作とされる数点の書についてみるに、第一に「黃州寒食詩卷」があげられる。この書は元豐五年（一〇八二）寒食節を迎えた際のものだが、行草体で書かれそのリズムといい筆さばきといいまさに彼の神氣骨肉血が一体となって躍動しているものである。次いで有名なものに「李白仙詩卷」があるが末尾に「元祐八年七月十日云々」とあり、南方追放直前の作であることがわかる。この書も行草体であるが、前者よりは落ち着いた筆法である。一方楷書の作品としては「宸奎閣碑」があげられる。これは大覚懷連が阿育王寺に住した時に諸人が樓閣を寄進し皇帝に賜った頌詩を奉じたもので、元祐六年（一〇九二）の作である。その書は大らかでしかも全体が一貫しており、少しの心の動揺も感ぜられない。一体黃州に流される以前の彼の作は小字の行楷書が多かったが、それ以後は自由に筆をめぐらした行草の詩卷或いは右の「宸奎閣碑」の如く堂々として微塵の狂いも感じさせない楷書など明らかに書風に変化を認めることができるのである。書は人間性によって書かれるという立場を主張する彼の作であることからすれば、この時期彼の人間性に大きな変化があったとしか考えられない。そしてそれは今まで述べた如く、禪の影響を受け彼の精神が高揚された時期とぴたりと符合するのであ

る。ここにおいて彼の書が禪の影響によって大きく変化しました成熟したことは明白であらう。

黄庭堅（一〇四五—一一〇五）、字は魯直、号は山谷。蘇軾同様文字・書画ともに善くし、しかも治平三年（一一〇六）進士に合格して以来一生を政治家として過ごし数度の流謫を経験するのである。元豊七年（一一八四）法雲法秀（一一〇二—一一〇九）に艶語で人心を動かすことを戒められ、発願文を表わし仏門に帰依した。後に黄竜山に晦堂祖心（一一〇二—一一〇〇）を訪ね道を問うた。祖心は「吾無_レ隠_ニ乎爾_一」

と答えるが黄庭堅には解らない。ある日山で目前の木犀の香をかぎ、万物が仏法の表われであることを悟したのである。『嘉泰普燈錄』・『五燈会元』に祖心の法嗣として記載される所以である。その後祖心の法嗣死心悟新（一一〇三—一一〇四）を雲巖寺に訪ねた。悟新は「新長老死学士死、焼作_ニ兩堆灰_一、向_ニ甚麼_レ處_ニ相見_一」と問うが黄庭堅は答えられず、「晦堂處參得底使_ニ未著_一在_一」と斥けられるのである。両者ともに死灰となった時こそ即ち真の無になった時こそが仏法の顯わ

れであることを黄庭堅が感得したのは、黔南への道中であつた。「謫官在_ニ黔南道中_一、昼臥覺忽然廓爾_一」と悟新に書を以て報じたのである。ここにおいて黄庭堅は「木犀華香」の真意をも悟了することができたのである。時に紹聖元年（一一〇九—一一一〇）から翌年にかけてのことである。元符三年（一一〇〇—一一〇一）

心が逝去するに及び、その塔銘を記し、彼の変化自在の禪風を讀えると共により一層その深さを感得したに違いない。今蘇軾の記になる禪者の塔銘は存しないが、黄庭堅は師の祖心以外にも延恩法安（一一〇二—一一〇四）、福昌知信（一一〇三—一一〇八）、圓明無演（一一〇四—一一〇五）等の塔銘を記しており、彼と禪門の關係の深さを示している。

一方彼の書学はかなり刻明に、時を追って変化したことが窺われる。例えば自ら元祐時代の時を評して「往時王定国道、余書不_レ工、書工不_レ工、是不_レ足_ニ計較_一事、然余未_ニ嘗心服_一、由_ニ今日觀之_一、定国之言、誠不_レ謬_一」と述べ、また「紹聖甲戌、在_ニ黄竜山中_一、忽得_ニ草書三昧_一、覺_ニ前所作太露_一芒角_一とも述べている。即ち彼の書は紹聖甲戌元年に大きな転機を迎え、それ以前の書を反省するに至つたのである。そしてその転機の場合と時こそが、黄庭堅が悟新の所問を明らかに禪においても高い境涯を会得したのと同じなのである。このことは彼の書と禪との關係を如実に物語っている。しかし彼の書学はそこに留まらなかつた。黔南以後の書にも反省を加えており、「余在_ニ黔南_一、未_ニ甚覺_一書字綿弱_一、及_ニ移_一戎州_一、見_ニ旧書_一、多可_レ憎_一、大槩十字中、有_ニ三四差可_一耳_一」と述べ、そして遂に元符三年（一一〇〇—一一〇一）には悟道の域に達したのである。「元符三年二月巳酉、夜沐浴罷、連引数杯、為_ニ成都李致堯_一作_ニ行草_一、耳熱眼花、忽然竜蛇入_レ筆、学書四十年、今夕所謂

麓山悟道書也」の如く述べている。しかも悟道を自覚した後でさえ反省を加えるのである。「建中靖国元年十二月甲午、觀此詩卷、筆意癡鈍用筆多不_レ到、亦自喜中年來書字稍進爾」の如く常に反省を加えた彼の書の代表作とされるものは、すべて晩年のものがあげられる。「伏波神祠詩卷」、「黃州寒食詩卷跋」、「李白憶旧遊詩卷」、「松風閣詩卷」、「范滂伝」等どれも晩年の彼の境涯の高さを示す逸品である。しかるにその事は、単に老熟の境による成果とは考えられない。先に彼の学書過程のほんの一部を示したが、彼の書は常に歩き続け、一所に留まることを否定した。その態度はそのまま禪の姿でもある。ここにおいて黃庭堅の書が禪の活作略によって歩きはじめ、そして歩き続けたことは容易に推察し得るのである。

米芾（一〇五一—一一〇七）、字は元章、海岳と号した。蘇軾や黃庭堅と異なり一生を下級官吏として過したが、書においてはまさに専門家で崇寧三年（一一一四）には書画學博士として登用された。彼の名は各種の僧伝には見当たらないが、禪との交渉がなかった訳ではない。『米海嶽先生墓誌銘』には「少与_二禪人摩詰_一游、詰以為_二得法_一。其逝不_レ怛、作_二偈語_一有_レ倫」と記され、また『語林』にも「元章晚年学_レ禪有_レ得、中略：拳_レ弘示_レ衆曰、衆香国中来、衆香国中去。擲_レ拏合掌而逝」と述べられており、彼が禪と関わりを持ったこ

宋代の書家と禪（長谷川）

とは明白である。また『宝晋英光集』卷六には「法雲仏国禪師白如來真贊」、「晦堂心如來真贊」、「黃竜真贊」が収められ、それぞれ法雲法秀の法嗣仏国惟白、晦堂祖心、祖心の師黃竜慧南に對する贊である。そして卷七には「天衣懷禪師碑」即ち法雲法秀の師天衣義懷の碑文が収められている。蘇軾や黃庭堅の交流した禪僧は雲門宗か臨濟宗黃竜派の人物であったが、米芾が文章をしたためた人物もすべてその範疇でしかも当時の風潮からすれば塔銘や碑を記す場合は余程強い因縁があり、関係者と深い交流があったことは確かである。

ところで彼は書においては「学_レ書貴_レ弄_レ翰、謂把筆輕、自然手心虚、振迅天真出_二於意外_一。所以古人書、各各不同。若一相似、則奴書也。其次要_レ得_レ筆、謂骨筋皮肉脂沢風神皆全、猶如_二一佳士_一也。又筆筆不同、三字三画異。故作_二異重輕_一、不同_二出_二於天真_一自然異_二之_一の如く、随所に平淡天真を述べる。この天真自然は一面には人為の否定即ち無為の肯定を意味するが、それが老莊思想における消極的なものか禅思想における積極的なものかは俄には弁じ難い。現時点では米芾の書における禪の影響ははっきりしないが、米芾その人が影響を受けたことだけは明言できるのである。

以上宋朝禅思想が書の分野へも及んだことの一端を示したが、今後より詳しい論考が必要と思われるのでいずれ稿を改めて論じたい。（注省略）

（愛知学院大学大学院）